

霞

—2018年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成30年6月30日発行(通巻第43号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(43)

古写真「筑波鉄道真鍋駅周辺」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(43)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 子どもと猫と小鳥(近世)・・・2
- 土浦城の秘密(近世)・・・3
- 頼政と隼太(近代)・・・4
- 筑波山と筑波鉄道(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「博物館に赴任して」・・・8
- コラム(43)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

昭和13(1938)年の大洪水のときの筑波鉄道真鍋駅付近のようすです。真鍋駅は、現在もホーム跡が残っている新土浦駅付近より土浦寄りにありました。ホームの側面が見えないほどの水位で、車両は水に浮かんでいるかのようです。6月28日から30日にかけて、台風の接近にともなう激しい雨が降り続いて桜川が氾濫し、中心市街地は水浸しになりました。
【情報ライブラリー検索キーワード「水害」】

博物館からのお知らせ

★★茂木雅博の館長講座★★

7月15日(日)・9月16日(日) 両日とも14:00~(1時間半程度)

テーマ:「館長が語る発掘物語」 会場:博物館視聴覚ホール

各回テーマ:「茨城県内の調査の成果2」(7/15)・「茨城県内の調査の成果3」(9/16)

【夏休みファミリーミュージアム】

★★ワンポイント解説会★★ おすすめの昔の資料を、学芸員がわかりやすく紹介します。

7月21日・28日、8月4日・18日(いずれも土曜日) 11:00~および14:00~の1日2回

展示品に関するクイズラリーも開催します。合格者には、記念品をプレゼントします。

★★ミニ掛軸をつくろう★★ 7/10(火)~電話または直接申し込み。参加料1,000円(材料費)。

1日目(裏打ち)7月24日(火)13:30~15:00

2日目(表装)7月26日(木)または27日(金)(希望日を選択)9:30~15:00

★★亀城公園探検★★ 7/10(火)~電話または直接申し込み。

7月31日(火)10:00~11:50 親子10組

亀城公園内にある土浦城の建物や、石碑などをめぐります。

★★戦争体験のお話をきく会★★ 7/10(火)~電話または直接申し込み。

8月11日(土) ①10:00~(土浦での学童疎開の体験) ②11:00~(土浦での疎開生活と勤労動員)

戦争体験のある土浦にゆかりの方から、当時のお話をうかがいます。聴講無料(見学の際は入館料が必要です)。

※上記の他、「かすみ人形をつくろう」(8/8)、「親子はたおり教室」(8/24・25)などのイベントも開催します。詳しくは、当館までお問い合わせください。

★スタンプカード発行のお知らせ★

イベントに参加された方にスタンプカードをお渡ししています。集めたスタンプの数に応じて記念品をプレゼント!



博物館マスコット
亀城かめくん

ねこ ことり
子どもと猫と小鳥

おかべどうすい からこず
—岡部洞水「唐子図」—

土浦藩の絵師岡部洞水（1780頃～1850）が描いた「唐子図」を2点、博物館で収蔵しています。髪ゆの結い方や衣装が中国風の唐子は、江戸時代には好んで描かれた画題です。蜻蛉釣とんぼつりり、独楽回こままわし、竹馬たけうまなど動物や玩具で無心に遊ぶ唐子たちが描かれている対幅ついでは、「霞」1号で紹介しました。

今回紹介する「唐子図」では、唐子は猫にまたがり、その両耳をつかんでいます。猫は小鳥すずめ（雀）を口にくわえ、前足で羽を押さえつけています。周りに散らばった羽が小鳥の抵抗を物語っていますが、首をくわえられ、くちばし嘴を苦しそうに開いています。唐子と猫、雀の三者が一体化しながら、無垢な唐子の表情に対して、猫は本性をむき出しにして雀に執着するという対比が際立つ構図となっています。

このあと、猫は雀を放したのでしょうか。そもそも、唐子は、猫に雀を捕らせたのでしょうか、それとも、猫がつかまえた雀を救おうとしているのでしょうか。鑑賞者にはさまざまな思いが浮かんできます。

実は、この構図は洞水の独創ではありません。先んじて描かれた、中国・明代（14～17世紀）の画家姜隱かんいんの「唐子図」（東京国立博物館所蔵）は構図がまったく同じです。

日本には鎌倉・室町時代から中国の書画が輸入され、それらは日本美術に大きな影響を及ぼしてきました。狩野派を始めとする江戸時代の画家たちは、室町将軍家の価値観を継承し、明・清代の構図や画法も積極的に取り入れて絵画を描いてきました。

洞水は、祖父、父ともに画業を専門とし、洞水自身は幕府の表絵師筆頭ひつどう、駿河台狩野家の洞白愛信とうはくあいしん（1772～1821）に学んで、師匠から洞水愛敬あいけいと名のることを許されました。洞水は、雪舟せつしゅうや狩野探幽たんゆうら日本の絵師の作品だけでなく、舜拳しゆんきよや馬遠ばえん、顔輝がんきなど宋・元・明代の絵画を写し取り、縮図（絵画の手本）として手元においていました。狩野家に伝えられた書画を見たり、写したりすることが可能な環境にいたからこそ、本作品が誕生したのでしょうか。

構図は同じですが、唐子のまとう薄物から猫のふさふさした毛並みが見えて見える表現などに、洞水の確かな技量と独自性が見て取れます。



岡部洞水「唐子図」

（木塚久仁子）

7/28（土）11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 縮図画卷 岡部洞水（当館所蔵・展示室2に展示）
- 岡部洞水「唐子図」（絹本著色）対幅—土浦藩御用絵師の横顔—（「霞」1号）



土浦城の秘密

そとまるず
—外丸図—

「外丸表奥御殿向惣絵図面」は、縦117cm、横120cm、ほぼ正方形の和紙に、総建坪648坪、畳数394畳半の土浦城外丸館の平面図が描かれています。数多くの部屋が廊下でつながり、まるで迷路のようです。この広い建物が、土浦藩の政治と藩主の生活を支えました。

土浦藩土屋家が9万5千石へと領地を拡大するのにもない、本丸の狭さを補うために建てられたのが外丸館です。最初に建てられたのはいつか、はっきりした年代は不明ですが、文化13(1816)年2月3日、田宿町から出火し、火は城にもおよび、外丸館は全焼してしまいました。その後、土浦藩は幕府から3千両を拝借して外丸館を再建したとされます(『図説 土浦の歴史』)。

文久2(1862)年、幕府が参勤交代制度を緩和し、大名とその妻子が国許へ帰国できるようになったため、土浦藩では外丸館を改築してこれに備えることにしました。この図面はその時のものです。

ひとつの大きな建物に見える外丸館ですが、藩主が執務を行う「表」と、藩主の家族の居住する「奥」があり、両者は板塀で仕切られていました。

「表」には、「御近習自付(近習の監視役)」「小祐筆(文書・記録を担当)」「坊主方(諸道具の管理)」「御料理人」「板前之者」などと書かれた部屋があります。大量に必要だったと思われる行灯については、保管しておくために専用の小部屋がありました。

「奥」には、藩主が休む「御寝所」、ふだん生活する「御居間」、風呂に入る「御湯殿」などがあり、藩主の居室のある棟のみ2階建てで、2階部分の平面図が1階の真上に貼られています。

「奥」は鍵の閉まる扉に遮られおり、番人の許可なく入室することはできません。「奥」に通じる廊下の入り口に「御鈴」と書いてあります。江戸城の場合、大奥の出入口には、大きな鈴が懸けられ、将軍がこの鈴を鳴らすと、御鈴番の女中が扉を開けました。外丸館でも同様の仕組みがあったようです。(木塚久仁子)



「外丸表奥御殿向惣絵図面」トレース
(出典『図説 土浦の歴史』)

8/4(土)11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 外丸出土品(当館所蔵)
- 土浦城模型(当館所蔵)



よりまさ はやた
頼政と隼太

—明治時代はじめの山車人形—

土浦の夏本番を感じさせる行事として、山車や屋台が曳かれる祇園祭があります。各町内では、威勢のよい掛け声とともにお囃子の音が響きわたり、近年は山車人形を乗せた姿を見ることは少なくなりましたが、現在も大町などの祇園祭でその雄姿を見ることができます。山車人形は山車と一体になったもので、山車の最上部に人々を見下ろすように取り付けられた、歴史上の有名な人物や、伝説・歴史物語を題材とする等身大の人形です。

博物館の収蔵資料には、『平家物語』にある「鶴退治」の場面を表現した、源頼政と猪隼太の山車人形（写真左）があります。平成6（1994）年に、中央一丁目地区から寄贈されたもので、長年にわたり町内の人々によって手が加えられながら、町のシンボルとして山車に飾られてきました。

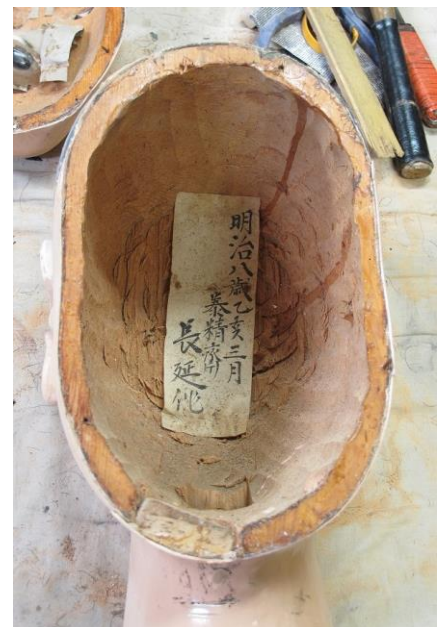
博物館では、頼政と隼太の山車人形が長年にわたる使用で傷みが目立つことから、平成26年から28年にかけて修復作業を行いました。人形は2つの頭と1対の腕、1体分の胴体、付属する小物類などからなり、頭は木製で前後に貼り合わせたもので、内部は空洞となり制作者を記した貼り紙がしてありました（写真右）。そこには、「明治八歳乙亥三月 泰精齋 長延作」の文字が読み、幕末から明治時代初期に江戸（東京）で活躍した人形師である古川長延（1826～没年不詳）の手によるものであることが分かりました。人形は明治8（1875）年3月に完成したもので、発注者である旧中城町（中央一丁目）には同年4月に納品されたことが、頭の収納箱の墨書から分かります。市内に残る山車人形としては最も古いものです。長延は江戸最後の山車人形師と称され、制作された人形は江戸（東京）で隆盛を極めた山車を曳く祭礼文化の地方への波及の様子を伝えています。

今回の修復にあたっては、人形に残る多様な痕跡と往時の頼政と隼太の姿を示す明治39年撮影の古写真をもとに、人形の風貌や表情、そして腕の動きなどを復元しました。そこには、夜毎、宮中に現れた化け物の鶴を弓で射止めた頼政と、郎党の隼太が短刀でとどめを刺す場面が表現されています。公家風の顔立ちの頼政と、鎧を身に着け浅黒く武骨な隼太の姿が対照的な存在となっています。

（関口満）



頼政（左）と隼太（右）の山車人形



人形の頭内部の状況

7/21（土）11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 山車人形収納箱の蓋（当館所蔵）
- 明治39年の古写真（当館所蔵）
- 頼政の弓（当館所蔵）



筑波山と筑波鉄道

—鳥の目で見ると90年前—

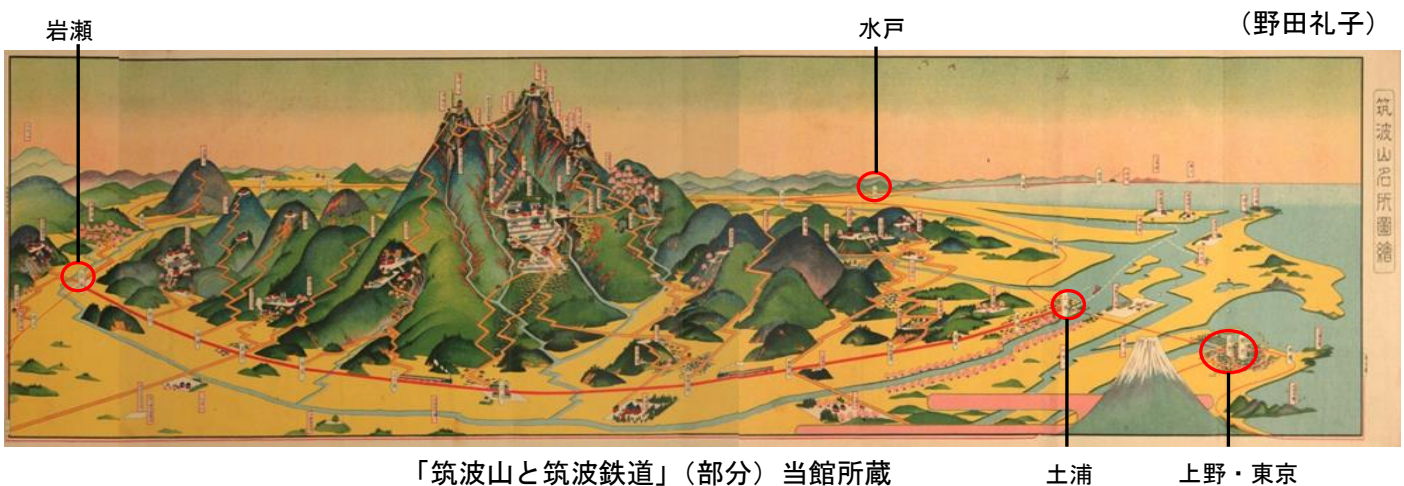
平成 30 (2018) 年 3 月、土浦駅に日本最大級のサイクリングの基地が誕生しました。旧筑波鉄道の廃線敷を整備した「りんりんロード」(約 40 km) と霞ヶ浦を一周する湖岸道路(約 140 km) を接続した「つくば霞ヶ浦りんりんロード」を楽しむためのもので、土浦はあらたにその最適な接続点になりました。

筑波鉄道は、大正 7 (1918) 年に土浦—岩瀬間が全線開通し、常総鉄道や関東鉄道の経営下にあった時代を経て、昭和 62 (1987) 年、70 年間の歴史に幕を閉じた鉄道です。「霞」9号「筑波山とケーブルカー」でも紹介しましたが、今回は鳥瞰図に描かれた鉄道としてふれてみたいと思います。

写真は、大正 14 年に発行された「筑波山と筑波鉄道」です。横長の鳥瞰図の画面に、筑波山がほぼ中央にそびえ立ち、その手前を湾曲しながら筑波鉄道が走ります。沿線には名勝や史跡も描かれ、詳しい案内は裏面に記載されました。土浦駅周辺には桜川の水郷汽船、海軍航空隊の飛行場、空には複葉機が微細に書き込まれています。一方で、ダイナミックな描写もされています。右手前に鎮座するのは富士山です。その右隣に上野・東京が描かれ、霞ヶ浦と房総半島が広がります。常磐線は上野から土浦・水戸へと北上しますが、その先に目を凝らすと北海道、樺太までが配置されています。水戸から岩瀬までの水戸線は筑波山の背後に配され、鉄道のアクセスが一体感をもって示されています。

大正 14 年は、筑波山のケーブルカーが開通した年でした。鉄道を利用し大幅に増えた観光客の旅のお供として、パンフレットは大いに活用されたことでしょう。鉄道沿線鳥瞰図は京都出身の吉田初三郎(1884~1955)によって創作されました。このパンフレットに署名落款の印刷はありませんが、「初三郎式鳥瞰図」として描かれた図のひとつといえましょう。初三郎式鳥瞰図には、全国各地の鉄道路線が地域色豊かに描かれ、さらに風物が書き込まれました。

近年はドローンによる空撮映像が鳥の目でみる楽しみを私たちに与えてくれますが、実風景では見えない風景までも想像力豊かに書き込まれた図も、今なお色あせない、眺めて楽しい画像ではないでしょうか。



「筑波山と筑波鉄道」(部分) 当館所蔵

土浦

上野・東京

8/18 (土) 11時・14時からこのページで紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 筑波鉄道速成協議員囑託状(個人所蔵)
- 筑波山ケーブルカー案内(当館所蔵)
- 筑波山絵葉書(当館所蔵)



市史編さんだより

土浦の鉄道運送—斎藤家文書から—

平成 28 (2016) 年 3 月の特別展『まちのしるし』の図録にある大正 6 (1917) 年の「常陸土浦町附近明細図」の商店の広告(右図)には、「土浦停車場前 ⊕ 斎藤運送店」の文字が見えます。大和町にあった ⊕ 斎藤運送店とはどのような店だったのでしょうか。

『土浦市史』によると、土浦に鉄道が開通したのは明治 28 (1895) 年で、土浦・友部間で、土浦・田端間の開通は同 29 年です。同 38 年に日露戦争に大勝したことで、鉄道による全国的な物資輸送が活発になりました。同 39 年に軍事上の要請で鉄道国有法が施行されると常磐線も国有化されました。大正 12 年には土浦まで複線化がすすめられ、輸送量が急増し、土浦・上野間の所要時間も短縮されました。

当館所蔵の斎藤家文書(穴塚)には、明治 29 年に発足した土浦運輸合資会社の ⊕ 印鑑の図案があり、商号として ⊕ を使っていたことが分かります。同 39 年 3 月の臨時株主総会議事録をみると、10 年間利益配当がなかったことから廃業も検討されますが、結局営業を 5 年間延長し、業務担当者を斎藤勝治他 2 名、社長を斎藤勝治に決定しています。5 年後の同 44 年 3 月に 10 年間の営業延長が検討されますが、清算人を選出し、同年 12 月に斎藤勝治に対して宅地・建物の売渡が行われました。土浦運輸合資会社は ⊕ 斎藤運送店に代わったと思われます。

大正 3 年 1 月、⊕ 斎藤運送店は東京市麹町区にあった明治運送株式会社(⊙)と取引店契約を締結しました。明治運送株式会社は各地に代理店を持つ運送会社でした。業務の計算事務などの史料もあり、業務円滑化のために取引店契約を結んだと考えられます。契約の一部だった看板預り証のやりとりから、契約は大正 3 年 1 月から大正 15 年 3 月までだったようです。

実際にどのような荷物を取り扱っていたのでしょうか。斎藤家文書には大正 2 年 3 月から昭和 2 (1927) 年 3 月までの貨物引換証発行通知書が約 90 枚残っています。特に大正 15 (昭和元) 年分は 53 枚、昭和 2 年分は 29 枚あり、明治運送株式会社との関係が終了するタイミングで、この史料群が残ったことが考えられます。

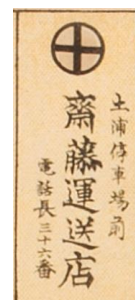
貨物引換証は陸上輸送において、荷送人の請求によって運送人が発行することになっています。斎藤家文書に残っているのは、複写版で、⊙ 代理店の斎藤運送店が到達地取扱店となった荷物についてのものです。つまり土浦に輸送されてきた荷物について知ることができます。

荷物の発送元は北海道から宮崎県延岡までの各地で、品物も多岐にわたります。例えば木炭は青森県八戸・栃木県西那須野・横浜・巣鴨から届いています。横浜・巣鴨からの木炭は中国産でした。綿も仙台・水戸・横浜から来ていますが、種類は様々で仙台の綿は染め工場から、横浜からは天津綿が送付されています。地域の特徴を示すものとしては、埼玉県川口から鑄物や鑄鉄が、富山県高岡から銅器が、名古屋からバルブ・ピストンや機械類が、大阪から自転車の部品が届いています。海産物は釧路からそばろ、秋田から佃煮、塩釜から削鯉や干しイカ、岩手県大槌から干しイカが届きました。農業機械や製糸機械など一回だけの取引の場合もあれば、綿や海産物のように何度も同じ所と取引が続いている場合もあります。荷受人は土浦町が多いものの、下高津村、下大津村、中家村、栄村、君原村、谷田部町等への荷物も取り扱っています。

図録『まちのしるし』の昭和 2 年「土浦町案内図」の大和町の部分には「合同運送店」と書かれています。昭和 10 年の「土浦案内図」裏面にある各種事業者名の一覧では「大和町 土浦合同運送店」とあり、電話番号は「三十五・三十六・六十三番」となっています。最初に見た大正 6 年の ⊕ 斎藤運送店の広告の電話番号は三十六番なので、土浦合同運送店が ⊕ 斎藤運送店の場所も電話番号も引き継いだと考えられます。

それまで水運で栄えた土浦において、近代以降鉄道が整備されていくなかで鉄道を活用した物資輸送に携わる業者が出てくる様子を知ることができました。

(市史編さん係嘱託 江島万利子)



常陸土浦町附近明細図より(当館所蔵)

地域と博物館

博物館の運営（２）～公立博物館として～

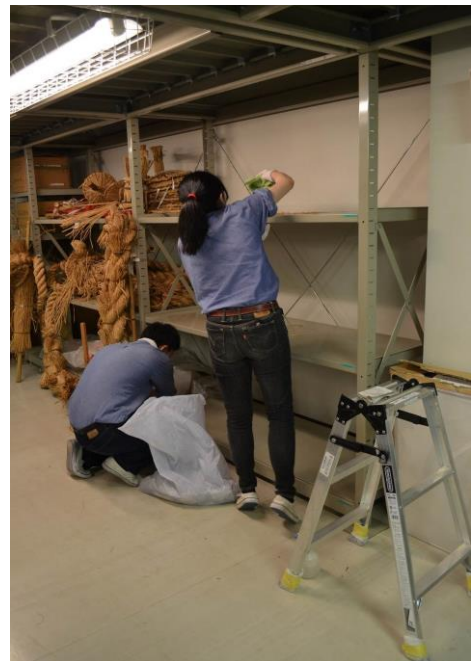
博物館法や当館の事例を紹介しながら、公立博物館の運営について考えてみたいと思います。博物館法をみると、公立博物館は地方公共団体の設置する博物館であり、地方公共団体の教育委員会の所管に属すると書かれています。また、博物館の設置に関連して「博物館の健全な発達を図るために、博物館の設置及び運営上望ましい基準を定める」と規定しており（第8条）、その文面からは設置と運営は一体のものとして捉えられており、博物館法は設置者による直営の博物館を原則に考えていると思われます。

平成 15（2003）年の地方自治法の改正により、指定管理者制度が創設され、地方公共団体が設置する公の施設の管理運営を、期限を定めて株式会社や法人などの民間に代行させることができるようになりました。公立博物館も指定管理者制度の対象と考えられています。しかし、その導入については、「入館者数や採算性などの市場原理と業務の効率化のみが重視される」、「期間限定のため事業の継続性が担保されず博物館に必要な中・長期的な計画が立て難い」などの不安の声が多く聞かれるようです。たとえば、指定管理者制度が目的とする効率化や予算の縮減によって、当館が実施しているような^{くんじょう}温湿度管理や資料の^{じょじんぼうばい}燻蒸、除塵防黴などの虫菌害対策のような博物館の裏方を支える経費は後回しにされやすいなど、博物館にとって大切な保存環境への悪影響が危惧されます。寄託資料や借用資料を含む、地域にとって重要な収蔵資料の保存が担保されないと、博物館への信頼そのものが損なわれる恐れがあります。

当館は昭和 63（1988）年の開館以来、博物館法の趣旨に沿って市直営の運営を継続しており、所管も教育委員会にあります。指定管理者制度が制定された平成 15 年度以降、当市においても公の施設の管理運営体制の見直しが検討されましたが、指定管理者制度は博物館施設の現状にはそぐわないとしてその対象から外されています。

指定管理者制度を導入した博物館では、これに合わせて博物館の所管を教育委員会から新たに首長部局に移管する事例が認められます。首長部局への移管は、博物館事業に対する執行部の理解が深まり、予算が取りやすくなるなどのメリットが期待されています。ただし、一方では、博物館の事業が短期的な政策や個性的な政治判断に左右されるデメリットも予測されます。目に見える目先の成果だけが優先され、本来果たすべき資料収集、調査研究、展示、教育普及の地道で持続的な活動のバランスが偏ったりするなど、博物館の理念がないがしろにされることが懸念されます。

指定管理者制度の導入にしろ、首長部局への移管にしろ、政治経済などの時局や時代の要請に応じたきわめて政策的な対応であり、地域資料の保存とその社会的活用を目的とする恒久不変の博物館活動には安易に当てはめるべきではないと考えられます。（塩谷修）



収蔵庫の除塵防黴作業
(虫や黴^{かび}の発生を防止するため、専門業者による徹底した作業を行います。)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、本年度4月1日付けで土浦市立博物館学芸員になりました西口正隆が抱負を語ります。

博物館に赴任して

みなさん、はじめまして。この4月から博物館で働いております、学芸員の西口正隆と申します。私は、茨城県のお隣り、埼玉県の上尾という場所で生まれ育ちました。残念ながら土浦へは来てから日が浅いです。それでもこの土浦には、どことなく親近感が湧く思いがします。それは博物館でお世話になっている職員のみなさん、ボランティアで来てくださるみなさん、来館されるお客さま、みなさんの心の温かさが、そう思わせてくれるのかもしれませんが、それがひとつの理由です。

もうひとつ、親近感が湧く理由があります。それは城下町として栄えた土浦というまちが、水運によって発展したという歴史です。なぜここに言及するのか。私は、これまで江戸時代の利根川や川越の河川を中心に、水運と地域社会の研究をしてきました。特に最近では土浦と同じ城下町である川越を調べていました。江戸時代に同じような繁栄を遂げ、水運が支えた土浦。その歴史に携わることは何かのご縁だと思っています。

最後に、博物館への思いを述べておきましょう。豊かな歴史をもったこの土浦に、この市立博物館はふさわしい質があると思います。職員目線のお世辞ではありません。古代から近現代まで、各時代の専門家が土浦の歴史を支えています。歴史・文化・資料にとって、これほど恵まれた環境は、全国的にもそう多くありません。

私も土浦の歴史を大切に、研究をはじめとする学芸員の務めを果たしていきたいと思っています。至らぬ点多いかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

(当館学芸員 西口正隆)

コラム (43) 古文書の持ち主になって

5月半ば、義父の法要で佐賀県に出かけました。木塚家に伝わる^{なが}長持があるから一緒に開けようと、数年前から叔母に言われていた約束^{もち}を果たすべく、供養の翌日、親戚の家に向かいました。戦前に建てられたうえ、すでに10数年空家なので荒れ放題。目当ての長持は2階にあり、土浦近辺で見るとよりも、一回り大きなものでした。蓋の上には膳や椀の箱が積まれ、それをどけるのにしばらくかかりました。「たぶん中は布団だろう」と思いながら開けると、陶磁器やこたつの櫓などととともに、薬研^{やげん}や薬瓶、古文書などが出てきました。亡父から、木塚家は医者であったと聞いていましたが、先祖の名が記された配剤録^{はいざいろく}や薬の通帳^{かよいちょう}など、亡父の話を裏付ける古文書・書籍がダンボール箱数箱に及びました。

家に古文書を発見した驚きと、これからどうしようという不安を初めて味わいました。博物館に古文書の整理や保管を託して下さる市民の皆さんは、こんな気持ちでいるのですね。あらためて身の引きしまる思いをいたしました。(木塚久仁子)

情報ライブラリー更新状況

【2018・6・30現在の登録数】

古写真 594点(+1)
絵葉書 506点(+1)

※()内は2018年5月12日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2018年度
夏季展示室だより(通巻第43号)
編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2018年度夏季展示は、2018年6月30日(土)~9月30日(日)となります。「霞」2018年度秋季展示室だより(通巻第44号)は2018年10月2日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)